

～労働者の安全と健康を守るために～ 独立行政法人 労働安全衛生総合研究所



職場における労働者の安全と健康を守る「独立行政法人労働安全衛生総合研究所（清瀬地区）」

市民 パルタージ

このコーナーは、市内在住の市民編集委員が市内の主要な施設を巡って、清瀬のまちの特徴を紹介します。



市民編集委員

山本美香さん
(竹丘在住・主婦)

My プーム＝菓子パン作り

働く私たちにとって常に隣り合わせにある「労働災害」。「労働災害」とは、業務中または業務に起因するケガや病気、更には障害や死に至る災害のことを言います。
一口に「労働災害」といっても、化学工場での爆発災害やトンネル掘削中の事故のように人命に関わる大災害から、長時間のデスクワークによる腰痛・視力低下などの業務上の疾病まで、ケースや職種はさまざまです。
今回は、「労働災害」を防止するため、あらゆる角度から調査や研究を進める「独立行政法人労働安全衛生総合研究所（梅園一丁目）」を紹介します。

最新の技術を駆使した 設備と研究グループ

清瀬駅南口から歩くこと15分。面積3万5千302平方メートルを有する広大な敷地内に10棟（本館棟を含む）の実験棟や施設を構える労働安全衛生総合研究所があります。清瀬地区と登戸地区（神奈川県川崎市）に施設を持つ厚生労働省所管の独立行政法人です。



お話しいただいた前田さん（中央）・黒谷さん（右）・古屋さん

昭和15年、安全運動の先駆者・伊藤一郎氏による働きかけによって集まった寄付を基に「厚生省産業安全研究所（港区）」として設立されたのが始まりだそうです。その後、昭和41年に清瀬にあった日本鋼管病院清瀬浴風院（結核療養所）跡地に屋外実験場を設置し、平成4年には港区から清瀬へ研究所が移転され、平成18年に産業安全研究所と産業医学総合研究所が統合され、「労働安全衛生総合研究所」が誕生しました。
現在、事業所における災害予防や労働者の健康保持増進、職業性疾患の病因・診断・予防、その他の職業性疾患に係る総合的な調査と研究により、労働者の安全と健康を守る取り組みを行っています。また、研究所には労働災害防止を目的とした「安全・健康・環境研究領域の研究グループ」の他、「国際情報・研究振興センター」や科学的・専門的知見に基づ

く労働災害の原因調査を行う「労働災害調査分析センター」なども設置されています。

労働災害の現状

前田豊理事長・黒谷一郎研究企画調整部長・古屋隆調査役に、労働災害の現状を伺いました。

平成24年の労働災害発生状況（厚生労働省調べ）によると、死者数（休業4日以上）は11万9千576人、業務上疾病者数（休業4日以上）は7千743人となっています。死亡事故発生率が高いものを職業別に見ると、建設業が全体の3分の1強を占め、次に製造業、陸上貨物運送業となっています。前田理事長は、「重大災害（低頻度だが発生すると大きな被害をもたらす）、一時に3人以上の労働者が業務上死傷する災害事故）は注目されがちですが、高所作業での墜落・転落や機械工場での挟まれ・巻き込まれ事故なども重要課題です」と話されます。

また、身近な所では「スパーマーケットのバックヤードに危険が潜んでいます」と黒谷部長。パンや肉のスライサーで指をケガ・切断する被害が多く発生することから、作業効率・安全面・経済性に優れた保護具や安全装置の研究が進められているそうです。

研究テーマの決定は？

研究課題は「プロジェクト研究」「基盤的研究」「行政要請研究」「受託研究」などに分類されます。この時、中心となるのが「基盤的研究」（例：「斜面下における落石防止壁基礎の耐衝撃性に関する研究」など）で、災害の発生状況や社会の動き、学際上での動向、研

究者の専門性などの観点から総合的に判断されるそうです。

また、平成24年度には重点研究課題として、13課題の「プロジェクト研究」（人材と研究費など、研究資源を集中させて数年で問題解決を図る研究）が実施されました。「その他、震災復旧工事の際の安全や近年増加する第三次産業（小売店・医療関係）など、産業の変化を見据えた災害防止にも努めています」と前田理事長は話されました。

解析・実験は あらゆる角度から

次に研究が行われる各実験棟に案内していただきました。
初めに伺ったのは「建設安全実験棟」の多目的大型実験室です。印象的だったのは、屋根からの墜落を想定した実験で、ハーネス（安全帯）の重要性を感じました。また、「材料・新技術実験棟」では、クレーンに使用されるワイヤロープが劣化・断線する仕組みについて教えていただきました。「施工シミュレーション施設」では、土砂崩壊の再現実験をパネルで解説していただくとともに、復旧工事において作業員が生き埋めとなる二次災害の危険を目の当たりにしました。また、研究所で開発された「土砂崩壊を簡易に監視する



最新の「両手操作式制御装置付きスライサー」



設置・使用が容易にでき、土砂崩壊から作業員などの労働者の安全を守る「表層ひずみ棒」

装置「表層ひずみ棒」もご紹介いただきました。これは斜面の小さな変化から土砂崩壊を予知することに成功しており、作業現場での普及が期待されています。

その後、「機械安全システム実験棟」では、最新の食品加工用切断機（両手操作式制御装置付きスライサー）やプレス機械を見学しました。そして、「電気安全実験棟」の粉体帯電実験室では、粉体（粉や粒）が帯電（物体が電気を帯びる現象）し、放電する様子や簡単な静電気放電を体験しました。

地域とのつながり

実験や研究の成果などを広く周知するため、労働安全衛生総合研究所では清瀬・登戸両地区で研究所の一般公開を行っています。前田理事長は、「研究対象が働く人であるため、一般公開は企業

労働安全衛生総合研究所 一般公開

- ①働く人の「安全」に関する研究
施設公開（清瀬地区）
日時 4月16日（水）午後1時30分～5時
- ②働く人の「健康」に関する研究
施設公開（登戸地区）
日時 4月20日（日）午後1時30分～5時

の方が来やすいよう毎年4月の平日に開催しています。しかし、職場の安全・衛生については入社後の教育だけでなく、早期教育の必要性を感じることから、地域の学校との連携も視野に入れていきたいですね」と話されました。また、今後の取り組みについて「これからも厚生労働省の労働災害防止計画に沿って、地域や行政と連携を取りながら、地道に災害減少につながる調査・研究を進めることが使命です」とも話されました。

取材を終えて

これまで、新聞などで取り上げられる重大災害について原因まで考えることはなかったのですが、取材から主な原因は「作業手順のミス」「安全に対する意識の低下」などで、いかに日ごろの安全への心構えが大事かを再認識しました。また、研究者の方々の地道な研究を拝見し、皆さんのおかげで私たちの安全が守られていると実感。「安全安心なまち」とは何かを考えると、私たちも、もっと「労働災害」に関心を寄せ、何らかのアクション（情報交換・発信）を起こすべきなのかもしれません。問合せ 独立行政法人労働安全衛生総合研究所（清瀬地区） ☎491・4512

※申し込み方法など、詳しくは同研究所ホームページ <http://www.jinosh.go.jp/announce/> 2014/open14/ または左記へ確認ください。
問合せ ①同研究所（清瀬地区） ☎491・4512 ②同研究所（登戸地区） ☎044・865・6111